激重執着系双子にお仕置きとして、クリシコされまくり、電車で我慢できず深イキアクメしちゃう女の子の話。

朝日　きなこ

「やッ…だめっ…」

通勤ラッシュの電車内。狭い車内のなかで、サラリーマンや高校生たちが憂鬱な表情で電車に揺られている。

そんな中、私は声を押し殺しながら、必死に体を捩っていた。

「まっ…やだぁ…ッ」

太腿を撫でてくる男の手を必死で押しやる。しかし、そんな抵抗は虚しく、今度は別の手が胸を下から揉み始めた。

「やッ…」

「自分が悪いんだからな？」

後ろから耳元に口を寄せられる。聞き慣れた声が、静かに鼓膜を揺らした。

「で、でも…こんなとこで…」

「でもじゃないでしょ。俺たちとの約束破ったのは君だよ？」
反対の耳元に別の声が響く。よく似ているが、さっきよりも明るい口調の男の声。
「そ、そうだけど…」
すると、男たちは私の耳にちゅっと口づけた。
彼らは、二卵性の双子の兄弟で、私のアパートの隣に住んでいる。一つ年下の彼らは、同じ大学に通っていて、以前バイト先が同じことがきっかけで仲良くなった。気が付けば、双子たちが毎日のように私の家に押しかけ、もしくは私を家に引きずり込み、二人で私を一晩中抱きつぶしてくるようになっていた。
最初は戸惑っていたが、無駄に良い顔と、二人の手管に今はすっかり夢中

になってしまっている。
「嫌がってるわりには、ちょっと触るだけで体跳ねてるけど？」
この少し意地悪そうな男が兄のコウ。
硬派な顔つきに、少し鋭い目つき。黒髪短髪で、両耳にいくつかピアスを開けている。
「ふっ…電車で俺たちに触られて感じちゃってるの、可愛すぎ♡」
この人懐っこい笑顔の男が弟のアオ。
シャープだが柔和な瞳で、少し癖っけの髪をセンター分けにしている。。
「ち、違う…も、だめだって…」
双子たちの手はどんどん大胆になっていき、とうとう服の隙間に指が伸びてきた。

なぜ、こんなことになっているのか。ことの発端は、昨日の夜。
三人でご飯に行く約束をしていたのだが、ゼミの教授に捕まったせいで行けなくなってしまったのだ。
もちろん、事前に連絡して謝ったのだが、二人はなぜか異常に怒ってしまい、どれだけ謝っても許してくれなかった。強引な所も多いが、いつもなんだかんだ優しい二人の予想外の反応に、戸惑った私の口から、思わずこんな言葉が漏れていた。
「お詫びに一つ、何でも言うこと聞いてあげる」
その瞬間、双子の目つきが変わった。
まずいとは思ったが、自分からの提案を取り消すこともできず、今に至る。
この変態双子のことだから、ろくでもないことだとは思ったが、まさか

「お仕置きに痴漢プレイさせろ」と言われるとは思わなかった。
過去の己の失言に後悔している間にも、二人の手はどんどん大胆になっていく。
「あっ…まっ！」
コウの指先が、スカートの上からおまんこに触れた。それだけで、快感を教え込まれた体はびくっと跳ねた。
「やッ…だ、だめぇ…！」
「あんまり、でかい声出すと周りにばれるぞ…」
そう言いながらもアオの手は止まることはない。それどころか、スカートの下から手を突っ込み、ショーツを指先ですっと撫でた。
「んぅッ…！」

思わず声が漏れると、後ろからアオに口元を手で覆われる。
「だめだよ…そんな声だしだら。周りの人に、電車でおまんこ触られて感じちゃう淫乱ってばれちゃってもいいの？」
「んんぅ…だって…ッ」
「我慢だよ、我慢。いい子にできたら、ちゃんと最後はベッドで抱いてあげる♡」
「ッんんぅ…♡」
アオの欲情した声が鼓膜に響いて、おまんこの奥がぎゅっと疼いた。その瞬間、コウの手がショーツの隙間から侵入してくる。
「あァ…だ、ダメ…♡」
「今、まんこ締まっただろ？ 下着越しでもまん汁が溢れてくるのが分かっ

た♡」

コウは意地悪な声でそう言うと、ぷるぷると勃ち上がったクリトリスを指で摘まんだ。

「んんぅッ…！♡」

「もうクリちんぽ勃ってる♡ 俺たちに痴漢されて興奮したのか？」

「ち、ちがッ…♡」

「ちがくねぇだろ。ほら、勃ちあがって、クリシコされたくてたまらないくせに♡」

お互いが聞こえるだけの僅かな声量で、コウが囁く。

言葉では否定するが、言葉責めだけでとろとろと溢れてくるまん汁のせいで、それがつまらない嘘だとばれてしまう。

「だめ…こんな、とこで、クリ触ったら、まわりにばれちゃう…」
「お前が静かにしてたらばれねぇよ。なぁ、アオ？」
「そうだね。まさか、こんな人の多い車内で感じたりしないよね？」
すると、クリトリスを摘まんだままのアオの指がゆっくりと動き出す。
「んんぅッ…！♡」
いきなり敏感な場所を刺激され、我慢できず声が漏れそうになる。口元を手で覆い、必死でこらえるが、コウの指はどんどん激しく動き出す。
「んんぅッ…だめ、やだぁ…♡」
「嫌なら、声出すなよ…」
コウはそう言うと、クリトリスを摘まんだまま、ぐにぐに♡とこね始めた。痺れるような快感が走り、足がガクガクと震える。

ぐにぐに♡しこしこ♡ぐにぐに♡しこしこ♡
ぐにぐに♡しこしこ♡ぐにぐに♡しこしこ♡
「んんぅッ♡んんぅ…ッ♡」
堪えきれない嬌声が唇の隙間から漏れていく。ダメだと思えば思うほど、コウの愛撫を感じてしまう。
「クリシコされるの、ほんと好きだよな♡ パンツの中で、クリトリス勃ち上がってきてる。ちょっと弾くだけで、腰動いてるのバレバレだから♡」
「ぁ…ぅううッ♡ んぅっ…♡♡」
コウが指先でクリトリスをピンっと弾く。見なくても、クリトリスがぷるぷる♡と勃起しているのが分かる。
「も…ダメッ……♡」

「ははっ、もうおまんこ我慢できないの？」
　クリシコの快感に翻弄されていると、アオの手も下着の中に侵入してきた。膣口を指でそっと撫でると、くちゅ♡とまん汁が音を立てた
「あぁ…ッ♡だ、だめ…それ、だめぇ…ッ♡」
「はいはい、ここ疼いて、我慢できないんでしょ？　おまんこ、俺たちの指でぐちゃぐちゃにされるの大好きだもんね♡」
「ちがっ…そういう意味じゃ…んんぅッ！♡♡」
「こら、声が大きい」
　焦って大きな声が出そうになった口をアオが反対の手で覆う
「君の可愛い声、他の奴らに聞かすつもり？」
「んぅ…」

穏やかだが、有無を言わせないアオの声が鼓膜を揺らす。
「だ、だって…」
「そう怒るなよ、アオ」
そう言ってアオを宥めると、コウは指先でクリトリスを押しつぶした。そのままぐりぐり♡と突起を弄り始める。
「んぅうう〜〜〜ッッ！♡♡♡」
突然の刺激に、腰がのけぞる。
「こんなにエロい体で、クリシコ我慢できるわけないだろ。こうやってクリトリス、ぐりぐりって押しつぶすだけで、腰へこへこさせてまんこ濡らしちまう変態だもんなぁ？♡」
「やぁ…ッ、だめぇえ♡ んぅうう〜〜〜ッ♡♡」

ぐにぐに♡しこしこ♡ぐにぐに♡しこしこ♡
ぐにぐに♡しこしこ♡ぐにぐに♡しこしこ♡
コウが心底楽しそうな様子で、クリトリスを弄り続ける。私の弱いところを知り尽くした愛撫に、声が漏れそうになる。唇を噛み、必死に嬌声を抑える代わりに、下半身がガクガクと震えた。
「や、だめぇ…それ、だめ、だからぁ〜〜ッ♡♡♡」
「ダメじゃねぇだろうが。勃起クリちんぽ、こうやってしこしこ♡されるの堪んないくせに♡」
ぐにぐに♡しこしこ♡きゅきゅ♡しこしこ♡きゅきゅ♡
ぐにぐに♡しこしこ♡きゅきゅ♡しこしこ♡きゅきゅ♡
コウのクリ責めに膣内がヒクヒクと収縮して、堪えきれないまん汁が太

股にとろぉ♡と垂れてきてしまう。
反射的に太股を閉じると、ぬちゃぁ♡とまん汁が肌の上で音を立てた。
「あぁ…ぅうッ♡ は、んぅッ…♡♡」
「おい、脚閉じんな。いつもみたいにできるだろ？」
こんな所でそんなの無理…！
そう思うのに、コウの命令に体は逆らえない。言われるがまま、足をガニ股に開いて、腰を前に突き出す。
「これやだぁ…ばれちゃうよ…ッ！」
「大丈夫だって、俺たちの体でお前の姿はちゃんと隠れてるから」
確かに、百八十センチ越えの二人とドアに挟まれた私の姿は、周りにはあまり見えていないようだ。それでも、こんなことを続けていたら、いつか絶

対にバレる。
　そうわかっているのに、快楽を前にして理性はあまりに脆く、私は足を閉じることができなかった。
「いい子だな♡」
「んぅ…ふっ♡ は、んぅぅ…ッ♡♡」
　コウに褒められて、おまんこをきゅう♡と締めてしまう。
　すると、アオが溜息を零しながら、私の膣口に指を添えた。
「はぁ…ほんと、コウは甘いよね。まぁ、でも、仕方ないか」
　アオの指が、遠慮なくずぶずぶ♡とおまんこに入ってくる。すでに蕩けたそこは、指をどんどん飲み込んでいく。
「あぁッ…！♡」

「君のおまんこは、堪え性のない淫乱雑魚まんこだもんね。電車で、クリトリス虐められて、おまんこぐちゃぐちゃにして、まん汁で下着にシミ作っちゃうなんて…ほんと変態♡」

コウの指が膣内で折れ曲がり、指の腹でGスポット強く押し込んだ。

「んんぅっ〜〜〜ッ！♡♡♡」

「はっ…今、軽くイったでしょ。分かるよ、おまんこぎゅうってなった♡」

「だめ♡ あッ…ッ、ほんとにだめ…♡ やだぁ…ッ！♡♡♡」

嫌だ。こんな所でこれ以上気持ちよくなりたくない。

私は、涙目になりながら、二人に訴えた。

「も、やめて…コウ、アオ…許して…」

私の声に、二人の顔つきが険しくなる。

「はぁ…お前、それ逆効果だから」
「コウのいう通りだよ…ったく、ほんと男を煽るのがうまいよね」
「なに、言って…ッ」
戸惑っていると、コウとアオがそれぞれ私の耳元に唇を寄せた。
「お前が可愛すぎるってことだよ…ッ！」
「…ッ？！」
二人の声から、余裕が消えていた。
本能がやばいと警鐘を鳴らす。
「ま、ちょ、やだ…」
「煽ったのはお前だ…ッ！」
「あぁ…ッ！♡」

コウの指が、クリトリスを摘み上げ、引っ張った。
「おまんこ、ぐずぐずにしてあげる♡」
「あぁッ…♡♡」
それに合わせて、アオの指先が、Gスポットを押し上げる。
「や、うそ…まっ…だめッ…」
そんな声も虚しく、二人の手が同時に動き出す。
「んんぅうぅぅ〜〜〜〜ッ！！♡♡♡」
クリトリスをしこしこ♡と引っ張られ、扱かれながら、Gスポットを何度も何度も叩かれる。
感じやすい性感帯を無遠慮に虐められ、ガニ股の足が震え、腰がへこへこと動く。

シコシコ♡じゅッ♡じゅッ♡シコシコ♡じゅッ♡じゅッ♡
とんッ♡とんッ♡シコシコ♡とんッ♡とんッ♡シコシコ♡
「ぅうう♡ぁ…んんぅッ！♡ や、んぅ、ま、だめぇッ…！♡♡♡」
「電車でクリトリスとまんこ虐められて、感じてるお前、可愛すぎるッ♡」
「まんこ、ぎゅうぎゅう吸い付いてくる♡ そんなに気持ちいいの？♡」
しこしこ♡しこしこ♡♡じゅぼじゅぼ♡じゅぼじゅぼ♡
じゅぼじゅぼ♡じゅぼじゅぼ♡しこしこ♡しこしこ♡♡
「んんぅ…あぁ♡♡ んぅう♡ やぁ…だ、だめぇ♡♡」
あぁ…だめ、イっちゃう…！
無意識に腰を突き出して、膣内をぎゅうぎゅうと締め付けていた。じゅぼ♡じゅぼ♡と泡立つおまんこの音は、ガタンガタンという電車の音がかき

消してくれる。
「やだぁ…いちゃ…イっちゃう……ッッ！！♡♡♡♡」
しこしこ♡しこしこ♡♡じゅぼじゅぼ♡じゅぼじゅぼ♡
じゅぼじゅぼ♡じゅぼじゅぼ♡しこしこ♡しこしこ♡♡
「もう、だめ♡ ッ、やだぁ……ッ！！♡♡♡」
せり上がる絶頂感に、首を振る。
嫌だ、嫌だ…こんな所で！
「も、だめ…だめぇッ♡ だめぇ……ッッ」
「「イけ…♡」」
重なった二人の声が脳天を貫いた瞬間、視界が真っ白になった。
「んんぅゔぅゔんゔぅ〜〜〜〜〜〜ッッ！！！♡♡♡♡」

待ち望んだ深い絶頂は理性をかき消し、快楽の沼に私を突き落とした。